
デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

ゼクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

【Nコード】

N1367Z

【作者名】

ゼクセル

【あらすじ】

ある事件で1人になった闇斗。そこへ黒いデジヴァイスが降ってきた。そして、闇斗はそこから新しい人生がはじまるのだった。これは原作にオリジナルを積極的に入れていく小説なので話の内容がガタガタになるかもしれないのでそこはご了承ください。

プロローグ（前書き）

デジモンアドベンチャーの小説初投稿です。よろしくお願いします。

プロローグ

1995年のある日、突然俺は1人になってしまった。原因はさっきのオレンジ色の恐竜と緑色の怪鳥との激突。奴らの戦いで近くにあった俺の家がオレンジ色の恐竜に潰されてしまった。両親の安否を確認するため家へと向かった。がれきの下から父と母らしき手がそれぞれ1つずつでていたので引っぱった。しかし、出てきたのは父と母の腕だけだった。そのとき、俺の父と母が死んだのを悟った。俺はその事実に号泣した。

あの事件の次の日、だから俺はこうして1人さまよっていた。どこにも行くあてがないから。親戚は「金がない」だの「部屋がない」だの建て前の理由を言って俺を追い返した。他の家も同じだった。さまよっているうちに人間の汚さやあのオレンジ色の恐竜への恨みや憎しみがこみ上がってきた。

「絶対に復讐してやる！」

そう言ったら、空から何か降ってきた。幸い周りには人がいなかった。降ってきたものを拾い上げてみる。それは黒いポケベルみたいで真ん中には画面が付いていた。そして、それは突然黒く輝き出し俺は空へと吸い込まれていった。そこで、俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

新参者なのでいろいろな意見をくれるとありがたいです。

主人公紹介（前書き）

闇斗のプロファイルです。

主人公紹介

あんざき
暗崎 闇斗 やみと

身長 126cm

体重 28kg

年齢 7歳

誕生日 8月10日

性別 男

性格 群れるのが嫌い

冷静

無口

孤独が好き

好きなもの

・蕎麦

・サバイバル

・バナナ

嫌いなもの

・甘いもの

・苦いもの

・甘ったれる奴

・命を大事にしない者

今作の主人公。我が道を行く1匹狼。3歳のデジモン事件以降心に負の感情をいだくようになる。それがきっかけで「闇の選ばれし子

供」に選ばれてデジタルワールドに行く。デジタルワールドに行つてからは闇の力を使役することができる。自分が「闇」であることを誇りとしているが命を大事にしない者を味方とは思わない。利用できる者は最大限に利用しようとする。そして闇斗のデジヴァイス限定の能力がいくつかある。

主人公紹介（後書き）

闇斗のデジヴァイスの能力はネタバレになるのでまだ言えません。

ダークネス進化（前書き）

話がガタガタです。すみません。

ダークネス進化

side 闇斗

……俺を誰かが呼んでいる。誰だろう？俺は目を開けてみた。すると、変な生き物がこつちをみて、呼んでくる。ああ、夢か……。そうおもい、俺はまた目を閉じた。

ガブッ

俺が目を閉じるとその変な生き物は耳をかんできた。

「いつてえええ！？」

俺はいきなりきた痛みに驚いて跳ね起きた。

「痛えな。何するんだよお前。」

？「だってまたねようとしてたもん。」

「そこは悪かった。さっきから俺を呼んでっけど何の用だ？」

変な生き物にまたねようとしたことを謝ってなんで俺を呼んでたのか聞いた。

？「まず自己紹介だね。ぼくはコロモン。ぼくは君を待ってたんだ。」

「俺…を？なんで？」コロモンという生き物がそうやってきたのでなぜか聞いた。

コロモン「その黒いデジヴァイスを持つ子がくるのを待っていたん

だ。ぼくはそのパートナーデジモンだから。」

…いま分らないことだらけだったぞ。

「待て、デジヴァイスとかデジモンってなんだ？」

俺はそうきいてみた。

（１０分後）

「なるほど、お前らはデジタルモンスター通称デジモンと言われる生き物でデジヴァイスはこの世界で大切なものなんだな。それを守るのがパートナーデジモンと言われるデジモンなんだな。」

約１０分間の説明でだいたい納得できた。…え？なぜそんなにすんなりと納得できたか？最近は大変なことづくしだからな。これくらいありじゃねと思ったから。

「説明ありがとよ。じゃーな。」

俺は後ろを振り向いて歩いてこうとした。

コロモン「えええ！？どうして？」

「俺には守りなんざ必要ない。１人で好きにやるのが１番なんだよ。」

そう言っ立ち去ろうとしたら、

ギイアアアア

その声とともに赤い恐竜がきた。

「な、なんだ！？あれは！？」

コロモン「ティラノモンだ！」

ティラノモンは俺に突進してきた。

「くっ…」

突進をかるうじてかわすもティラノモンはすぐに振り向いて炎を吐いてきた。これには反応できず死ぬ覚悟をした。しかし、俺は死ななかった。なぜならその炎をかわりにあいつが受けてくれたからだ。

「お前！？…どうして、どうして俺の身代わりなんか…」

コロモン「だって守らなくちゃいけないもん。だからだ…よ。」

俺が聞くとあいつは弱々しく答えた。ティラノモンはまた突進をしてきた。そのとき、俺の心が「ティラノモンに向かって手をかざせ」と言ってきた気がした。その通りに、俺は突進してくるティラノモンに手をかざす。すると、漆黒なオーラが出てきて、ティラノモンの突進を止めた。

「おい、お前。どういった理由か知らんが俺のパートナーデジモンに手をだしたのは許さねえ。」

その言葉でティラノモンを威圧し、漆黒のオーラで後ろに倒した。

「コロモン、いくぞ。さっき言っていた進化だ。」

俺がそう言つとコロモンは黒い光に包まれた。

コロモン　　ダークネス進化！……………ブラックアグモン！

コロモンがブラックアグモンに進化した。しかし、明らかに体のサイズが違った。ブラックアグモンじゃ勝てないと思った。

「ブラックアグモン！俺がやるから退け！」

俺がそう言うが

ブラック「大丈夫だよ。そこで見てて。」

ブラックアグモンがティラノモンに向かっていった。すると、ブラックアグモンはその体から想像できないほどのスピードでティラノモンを圧倒する。そして、

ブラック「ベビーフレーム」

ブラックアグモンが黒い小さな火の玉を吐いた。ティラノモンは有り得ないくらいに吹き飛んだ。そして、ボロボロになって逃げた。

「…凄いな、ブラックアグモン。」

ブラック「名前長いからブラックでいいよ。」

「そうか。」

そんな会話をしてるとある疑問が浮かんだ。

「それにしてもなんであんなに体のサイズが違ったのかてんだ？」

？「それはお前の持つ闇の力とブラックデジヴァイスによるものだ。」

俺が疑問をもらすとそれに答えるようにヴァンパイアみたいなデジモンが突然現れた。

ダークネス進化（後書き）

ダークネス進化は普通の進化との相違点がいくつもあります。意見、感想お待ちしております。

ヴァンデモン（前書き）

今回は説明だけです。ストーリーは全く進みません。

ヴァンデモン

突然姿を現れたヴァンパイアみたいなデジモン。

「なんだ？お前は？」

？「私の名はヴァンデモン。君と同じ闇を愛する者だ。」

俺が聞くとヴァンデモンと言われるデジモンはそう言った。

ブラック「ヴァンデモン！？確か最近力を上げている」「ナイトメアソルジャーズ」のリーダーだよ。なんでこんな所に？」

ブラックがヴァンデモンについて説明した。だが、いまいち納得いかないところがあるなあ。

「そういえばさっき「闇の力」とか「ブラックデジヴァイス」とか言ってたけど全く意味が分からないが…」

ヴァンデモン「教えてやってもいいが1つ条件がある。」

ヴァンデモンは俺が質問するとそう切り返してきた。

「…なんだ？」

ヴァンデモン「私の仲間になれ。」

俺が聞いたらヴァンデモンは仲間になれと言ってきた。

「……じゃあまず俺の質問に答えてもらう。仲間になる件はその後だ。」

俺は仲間になるつもりはないがいろいろ情報を聞けるかもしれないということであんな風に言った。

ヴァンデモン「……いいだろう。まずは何から聞きたい？」

するとヴァンデモンは俺の要求に応じてくれた。

「まずは闇の力についてだ。闇の力にはどういう能力があり、使用者にどんな効果を与える？」

ヴァンデモン「闇の力にはいろいろな能力がある。例えば、先ほど貴様がティラノモンに使ったように盾にしたり、相手に球状にしてぶつけることができる。そして、使用者に与えられる能力についてだが知力、体力などの上昇だ。だから貴様は3歳にも関わらず大人っぽいしゃべり方や難しい言葉が分かるのだよ。」

なるほどな。だからこんなに流暢にしゃべれるのか。さっきのティラノモンの件についても納得がいくな。

「じゃあ次はブラックデジヴァイスについてだ。」

ヴァンデモン「ブラックデジヴァイスは普通の神聖なるものとちがって暗黒なものだ。闇に反応し、闇と共鳴することで普通の進化と異なる進化「ダークネス進化」ができる。ダークネス進化で進化したデジモンは必ずウィルス種になり、通常とは違う異質な能力も備わるようになる。貴様のパートナーデジモンのブラックアグモンで

「いえは高速移動のことだ。弱い成熟期のデジモンなら簡単に倒せるだろうな。」

「これも納得がいくな。ブラックがティラノモンのときにみせた高速移動についても成長期にも関わらず成熟期を倒したことも理解できた。ヴァンデモンの情報は信憑性があるな。」

「もう一つ聞く。お前の組織は何のためにある？」

「ヴァンデモン「私の組織は光と闇が混ざり合った世界を作り出すためというんなものへの復讐だ。」

「その中に人間は？」

「ヴァンデモン「もちろん入っている。」

「利害が一致するな。これを利用しない手はないな。」

「いいだろう。仲間としてではなく手を組むだけだ。そこを間違えるなよ。」

「ヴァンデモン「そのパートナーデジモンは？」

「ブラック「僕は闇斗にどこへでもついていくよ。」

「ヴァンデモン「よからう。では私の城へ行く。ついてこい。」

「城とか持ってるのかよ。ヴァンデモンの城へ向かう俺とブラックだった。」

ヴァンデモン（後書き）

意見、感想お待ちしております。

交渉（前書き）

すみません。話がガタガタかもしれません。

交渉

俺らはヴァンデモンについていき、城にたどり着いた。

「随分と趣味の悪い城だな。」

ヴァンデモン「よくそれを城の主人の前で言えるな。まあ、中に入るといい。」

ヴァンデモンはその後城の正門を開け、俺らの中へ入れてくれた。中も想像通り趣味が悪い。まあ、言わなかったが。

？「ヴ、ヴァンデモン様！そ、それは人間ではありませんか！？い、入れていいのですか？」

ヴァンデモン「そいつは闇の紋章の選ばれし子供だ。バケモン共部屋を案内してやれ。」

バケモン「そ、そのかたが…分かりました。では闇の紋章の選ばれし子供様。部屋を案内します。」

「俺はそんな長い名前じゃねー。闇斗つつ名前があるんだよ。」
バケモン「すみません。闇斗様。部屋へ案内します。」

この後バケモン達のご案内で自分の部屋についた。中は少し薄暗いが城の中よりまだマシだった。俺はすぐに床に転がり込んだ。久しぶりに安心して休めると思ったからだ。まあ、絶対に安心とはいえない気がするが。

ブラック「なあ、闇斗。」

闇斗「ん、どうした？ブラック。」

ブラック「あのさ……」

ブラックが俺に何か言いかけたとき、

ヴァンデモン「闇斗。交渉の内容確認だ。」

闇斗「わかった。わりいブラック。また後でな。」

俺はヴァンデモンによばれついていった。ついていくと「尋問室」と書かれた部屋についた。……え？尋問される？

ヴァンデモン「別に尋問はしない。内容確認だけだ。」

うお！？お前人の心読めるのか？

ヴァンデモン「顔にでていたぞ。」

……マジ？俺そんなに分かりやすい？

ヴァンデモン「内容確認だ。私達の仲間になる条件としては「人間への復讐」、「闇の紋章の探索」これでよいか？」

「待て。闇の紋章ってなんだ？」

ヴァンデモン「闇の紋章とはダークネス進化の補助道具だ。これがあれば成熟期以上にも進化が可能になる。あと、貴様の闇の力を制

御しやすいなる。」

なるほど。理解した。でも、条件が少ないなあ。あともう1つくらい……そうだ！

「ヴァンデモン、話を戻すが交渉の条件にもう1つ付け加えてほしいことがあるんだが。」

ヴァンデモン「なんだ？」

「俺をリーダーにした特別部隊をつくること。つくったらそちらの依頼も引き受けよう。どうだ？」

俺の付け加える交渉内容についてヴァンデモンは考えた。その結果、ヴァンデモン「いいだろう。人員もそちらで選ばせてやる。」

ほっ。なんとか成功した。

ヴァンデモン「では交渉内容はこれでよいか？」

「ああ。」

俺は交渉を承諾して自分の部屋に戻った。ブラックが床で寝ていた。しかし、扉を開ける音で起きてしまった。

「あ、すまん。」

ブラック「別にいいよ。」

「そついえばさっきなにを聞こうとしていたんだ？」

俺はさっきなにを聞きたかったかブラックに訪ねた。

ブラック「あのさ…僕邪魔なんだよね？」

「…は？なんで？」

ブラック「だって、闇斗僕と会ったとき俺は1人でいいて言ってたじゃん。」

ああ、まだあれ気にしていたのか。別にもう気にしなくていいのに。

「最初はそう考えていたけど、あのときにお前がいなかったら、俺は死んでいた。守ってくれた奴を嫌う理由なんてどこにもないぜ。ましてやこの世界はわからないことだらけだ。また死んでしまう状況になるかもしれない。だから、俺のパートナーデジモンになってくれないか。俺はそのほうが助かる。」

ブラック「だゝから、闇斗のパートナーデジモンなんだって僕。これからもよろしく。」

ブラックがそう言つと俺らはお互いの手を握りあつた。こうして、俺らの旅は始まるのだった。

交渉（後書き）

闇斗がなぜあのような交渉内容を提示したのか、後の話で明らかになります。

原作開始（前書き）

なんかプロローグみたいになってしまった。

原作開始

Side闇斗

よお！俺の名前は暗崎闇斗。俺はデジモン事件の次の日にふらつき歩いていると空からブラックデジヴァイスが降ってきた。それを拾うと気がついたら、デジタルワールドに飛ばされていた。そして、俺はそこでブラックアグモンのことブラックとヴァンデモンと会い、ヴァンデモンの城へ住むこととなった。さあ、ここで俺の仲間と叫べるデジモンを紹介しよう。

まずは俺のパートナーデジモンで素早い動きが得意。ダークネス進化で成熟期のブラックグレイモンまで進化が可能。いざとなると頼れる存在。ブラックアグモンのことブラック。

常に冷静沈着。身軽な動きで敵を翻弄する。チームではお姉さんの存在。猫型デジモンテイルモン。

相手の心が読むことができる。特技は超能力。魔神型デジモンウィザーモン。

相方のパンプモンととても仲良し。岩男みたいなデジモンゴツモン。ゴツモンの相方。「トリックオアトリート」という言葉が一番似合うデジモンパンプモン。

この5匹とリーダーである俺と合わせて 俺の部隊は成り立っている。体は子供、頭脳は大人。その名も…

ブラック「なに1人でブツブツ言ってるの？」

「驚かすなよ。びっくりしたじゃねーか。」

ブラック「なんかヴァンデモンが呼んでたよ。」

「何？あいつが？」

最近滅多に呼ばれることがなかったのになあ。だるいけど仕方ない。行くか。

ブラック「あ、それと全員でくるなって言ってた。僕と闇斗だけでこいだって。」

はあ！？なぜに？いつも全員で行くのに？なんか嫌な予感がしてきたなあ。まあ、行ってみるか。

というわけでヴァンデモンの部屋にきたんだが肝心のヴァンデモンがいない。全く呼び出しておいてなんなんだよ。

ヴァンデモン「来たか。闇斗にブラックよ。」

「で、何だよ。なんか俺らだけでやらなければならぬ用なんだろう

「？」

ヴァンデモン「流石だな。鋭いぞ。では、用件を言っぞ。よく聞いておれ。」

つたく。なんなんだよホント。早く言えよ。

ヴァンデモン「お前たちには人間界に行ってもらっぞ。」

「……………はあ？」

そのときに俺の運命の歯車が動き出した。

原作開始（後書き）

次回はいろいろ説明の回だと思っています。

人間界へ（前書き）

短いです。すみません。

人間界へ

前回のあらすじ
突然の辞令。

S i d e 闇斗

い、今こいつなんて言った？に、人間界に行けとか言わなかったか。いや、聞き間違いかもしれん。もう1回聞こう。

「い、今なんつった？」

ヴァンデモン「聞こえなかったか？人間界に行ってもらったと言ったのだ。」

……間違いないようだな。しかし、なぜ俺らだけ？人間界を攻めるならいつきに攻めたほうがいいだろう。

ブラック「どうして僕らだけ？」

まさしく俺がしようとした質問だな。でも、本当になんで？

ヴァンデモン「なぜなら……選ばれし子供たちが現れたからだ。」

え？選ばれし子供たち？確か…俺と反対の神聖なデジヴァイスを持った子供たちか。

「じゃあ、俺が潰しにいけばいいじゃねーか。」

ヴァンデモン「いや、お前たちは先に人間界に行って調査してもらいたい。」

「調査？なんの調査だ？」

ヴァンデモン「選ばれし子供8人目の調査だ。」

……はあ？さっき選ばれし子供たちが現れたって言ってたじゃねーか。

「8人目？どういうことだ？説明しろ。」

ヴァンデモン「まず選ばれし子供は全員で8人目いるのだが今デジタルワールドに来ている子供たちは7人だ。つまり、あと1人が人間界にいるはずだ。そこでお前たちにはその8人目の調査、デジタルワールドと人間界をつなぐデジタルゲートの設置を頼みたい。よいか？」

なるほど。つまり、俺らで8人目を殺してこいってことだな。まわりくどくそう言えればいいのに。

ブラック「ちよつと待ってよ。僕らは人間界行くんだよね。デジタルゲートがつかっていないのにどうやって行くのさ？」

あ、ホントだ。気づかなかった。

ヴァンデモン「つながっているんだが、こちらから一方的にだと2人しか通れないのだ。人間界からもデジタルゲートを開かないといけないんだ。」

へえ。そうなんだ。だから、俺らだけで行けってことか…。納得。

「じゃあ、ヴァンデモン。俺の仲間を頼んだぞ。もし、殺したりしたら……てめえを殺すから。」

ヴァンデモン「……………いいだろう。それでは準備はいいか？」

ブラック「いいよ。」

人間界か…。行きたくないけどなあ…。

「大丈夫だ。」

ヴァンデモン「それでは行ってくるん…ってもう入ってるし！」

俺らはデジタルゲートに入ってた。気がついたら、誰もいない路地裏にいた。

人間界へ（後書き）

次回は光ヶ丘でお台場探索の回。

光ヶ丘にて（前書き）

超駄文です。お許しを。

光ヶ丘にて

Side 闇斗

俺らは無事人間界に着いた。

「さてとまずはお台場という所に行かないとな。」

なぜお台場かと言うと…人間界に行く前のこと……

ヴァンデモン「8人目の子供はおそらくお台場にいるはずだ。まずはお台場という地名を探して向かってくれ。」

「待てよ。探して向かえてどうということだ？それは。」

「行ってみればわかる。あと人間界の金を渡しておこう。」

「俺には必要ないんだが……」

ヴァンデモン「…………お前はどうかやって人間界で生きていくつもりだ？」

「物をかつさらえば万事解決！」

ヴァンデモン「解決させるな！万事解決じゃなく万事休すの間違いだろ！……いいか、もしそんな事をやって捕まってみろ。お前の計画も私の計画もパーになるんだ。お前なら脱獄できるが警察が街中に

出回ったら面倒なことになるぞ。だから、人間界の法にふれることはするな。」

「…分かった。だが1つ質問だ。」

ヴァンデモン「何だ？」

「どうやって人間界の金を作ったんだ？」

ヴァンデモン「データ以外になにがある？データさえあればいくらでも作れる。」

「……………」

すごいご都合主義だなあ。おそろしい。さて、無事人間界に着いたのはいいんだが、

「……はどこだ？」

そう。ここがどこか分らない。それと問題がもう1つ。

「…ブラックは？」

辺りを見回したがブラックは見あたらなかった。迷子かなあ？

ブラック「迷子じゃねーよ！ブラックデジヴァイスの中だよ！」

あ、そうだった。さっきブラックデジヴァイスに収納したんだった。

…え？ブラックデジヴァイスにはデジモンを収納する機能ついて
いるの？俺だって最初は気づかなかった。気づいたのは俺が6歳の頃
だ。あると分かったときにはなんというご都合主義と思ったぞ。さ
てここはなんという地名なんだ？なんか懐かしい気がするが…

あれから2時間くらい探索した結果3つ分かったことがある。

1・ここは光ヶ丘である

2・食べ物などは金を使って購入する

3・お台場までは電車で行ったほうが便利

まあ、3つ目に関しては当然か…。…え？2時間なんでとばしたか
？そんなん作者に聞け。まあ、どうせ面倒くさいからだろう。それ
と聞いたことなんだが高さが高い建物多すぎ！自然が全くねーじゃ
ねーか。これだから人間という生き物は…。自分のことしか考えて
ねーな。まあ、とりあえず飯にするか。そこらた辺のてきとーな店
にしよう。

店入1「おかえりなさいませ。ご主人様。」
ボタンッ

………何だ？今の気色悪い物体は？吐き気がしたぞ。あんなものまで作り出すのか？（人間です。）み、見なかったことにしよう。別の所に行こう。お、あそこに24時間営業の店が…。ん？ちょっと待ってよ。24時間って1日だったよな。そんならあそこの店の人は無休で働いているのか！なんと非道な…。（闇斗は人間界について全くの無知です。）とりあえず入ってみよう。

店員1「いらつしやいませ。」

あ、よかった。普通の店だ。さて、どんなのを食おうか。つーかここ、なかなかいろんなものがあるなあ。おにぎりにパン、弁当などバリエーションが豊富だ。（コンビニです。）どれにしようかな？

というわけで腹も満たしたし、お台場に向かおうか。…え？なに食べたか？蕎麦にきまつている。しかし、ホントにすごかったなあ最近のレストランは。（コンビニです。）レストランから歩いて5分「光ヶ丘駅」という所に着いた。電車の乗り方くらいは知ってるぞ。切符買えば万事解決だろ！

「しかし……切符どうやって手に入れるんだ？」

俺が切符を買い電車に乗ってお台場に行くのに3時間かった。

光ヶ丘にて（後書き）

次回はお台場の話です。

お台場にて（前書き）

今回は原作キャラクター1人出てきます。

お台場にて

S i d e 闘斗

やつとお台場についたぜ。電車の中で吐き気がしてヤバかった。おかげでかなり時間が経つのが長く感じたぜ。ええと……ここで………何すればいいんだっけ？

ブラック「デジタルゲートを繋げるのと8人目の探索でしょ。しっかりしてよ。」

ああ、そうだった。しかし、デジタルゲート………どこに作ればいいんだ？光ヶ丘より自然がなく、建物が多いのだが………作るのに適した場所があるのか？まあとりあえず探してみよう。

1時間探索したら人目のないちょうどいい池を見つけた。その真ん中には島みたいなのがある。俺は島みたいな所に移るとブラックをブラックデジヴァイスから出した。

ブラック「久々の外の空気だあー。」

ブラックが背伸びして言った。

「ブラック、デジタルゲートを繋げるのを手伝ってくれ。1人でもできるがこの後は8人目の探索があるからな。」

ブラック「うん。分かった。」

俺が頼むとブラックはこころよく引き受けてくれた。ちなみに今は午後2時。俺らが人間界に来たのは午前8時くらいだ。

「よし。これで終わり。」

時間について説明しているうちにデジタルゲートを繋げる作業が終わった。

「ブラックありがとうな。デジヴァイスに戻ってくれ。」

そう言うとブラックはデジヴァイスに入った。さて、次は8人目の探索か…。どこにいるのだろうか。

や、やべえ。なんか体が黒っぽい物体に襲われている。(ただのガンク口女です。)なんだ？あれは？女が着てそうな服を持って追

っかけてきやがった。俺はあんなの断じて着ないからな。ってどこだ？なんかマンションみたいだな。今はそこにあったダンボールに身を隠している。どうしてこうなった？少しふりかえってみよう。

（30分前）

俺は街中を歩いてた。やはりここは不思議に満ちあふれている。なにか小さい四角い箱を耳にあて、1人言をつぶやいている者がいなり（携帯電話です。）ゴミとシンクロしたオッサンがいたり（ただの酔っ払いです。）不思議で溢れている。しかし…

？「ネエ、ちょっと僕？」

「あ？」

なんだよ。俺は急いでるんだよ。

？「ちよつとこの服着てみない？」

「断る。」

？「「「「ちよつと着なさいよ。」「「「「「

気がつくとも数人のガンクロな物体に囲まれていた。…モンスターハウスより恐ろしかった。そして、30分逃げ続け今に至る。あんなの着るなんて冗談じゃない。闇の力で殺つてもいいんだけど……あとで面倒なことになるんだろうな。

？「ネエ」。あの子どこお。」

ま、まずい。こ、このままでは見つかるのは時間の問題だ。あれ？この扉空いてるぞ。よし。一旦この中に避難させてもらおう。

ボタンッ！

ふう。これでもう大丈夫だろう。

？「……………あなた、誰？」

俺は突然話しかけられたのでビクツとなつてしまった。後ろを振り向くと俺と同じような年齢の女がいた。

バッキューン

な、なんだこの感情は？なんか胸の鼓動が早くなっている？今までこんなことはなかったはずだ。

「……………暗崎闇斗だ／＼／」

？「私は八神ヒカリ。よろしくね、闇斗くん。」

ヒカリという女がそう言つて微笑みかけたとき俺の胸の鼓動がさらに早くなった。これが8人目の初めての接触だった。

お台場にて（後書き）

次回はヒカリとの会話の回になると思います。

八神家（前書き）

オリジナルストーリーに原作が少し入ってきます。

八神家

Side 闇斗

俺は今八神という家にお邪魔している。先ほどのガンクロの物体から逃れるために。そして、さっきからなぜだか胸の鼓動が高鳴っている。

ヒカリ「ねえ？大丈夫？」

まただ。この女に話しかけられると鼓動が早くなる。なぜだ？誰か教えてくれ！……とりあえず、心配されているからなにか言っておこう。

「……大丈夫だ／＼」

と言うのが説得力はないだろう。なぜなら顔が赤いと思うからだ。

ヒカリ「誰かに追いかけられていたみたいだけど……」

「なんか……女の服を持ったガンクロな物体に……追いかけられていた。」

ヒカリ「多分それは「女装オバサン」だよ。最近噂になっていて被害者が何人もいるって話だよ。」

あのガンクロな物体も人間だったのか……。少しびっくりしたな。

ヒカリ「そういえば闇斗くんはお台場初めて来たの？」

……い、今ファーストネームでよ、読んだ？な、なんだか照れる
／／／

「まあ…そうだな。今日来たばかりだ。」

ヒカリ「じゃあ家族は？」

闇斗「……………」。

八神の質問に俺は表情を暗くしてしまった。俺には家族つつもん
はいないからだ。

ヒカリ「……………もしかして……1人？」

「……………ああ。」

八神は質問をかえ、俺はその質問に暗く答えた。家族か…。もう親
の顔なんて覚えてないな。もう1回くらい親の顔をちゃんと見てみ
たいなあ…。

ヒカリ「……………」。

しばらく沈黙が続く。き、気まずいな。だ、誰かこの沈黙を破って
くれ。

ピンポン…

そう考えていると誰かがこの家のインターホンを鳴らした。八神が
「はい」と言っって小走りで行った。

ガチャッ

ヒカリ「おかえりー。お母さん。」

お、お母さん！？ずっとここにいるのも変だしそろそろ行くか。

八神母「あら、あなたは？」

「はじめまして。暗崎闇斗と言います。この度はある事情で少しお邪魔させてもらいました。それでは。」

そう言つと俺は八神家を立ち去ろうとした。

ヒカリ「待つてよ！闇斗くん！どこに行くの？」

「どこへでも行く。どうせなにもないしな。」

ヴァンデモンももう来ているはずだから報告しないとな。

ヒカリ「お母さん！闇斗くんをこの家にいさせてあげて！」

…え？なんで？俺は赤の他人だぞ。そんな俺をどうして…。

ヒカリ「闇斗くんに親がないの。だから住む場所がないみたいだからここにいさせてあげて。お母さん。」

八神…：…気持ちはいがたいけど…だめだ。ヴァンデモンに巻き込まれてしまう。

八神母「私はいいけど…」

？「ただいまー」

あら、太一。どうしたの。キャンプは？それにそれはなに？」

八神の母さんがふりむくと俺より3歳くらい年上で髪がツンツンに立って頭につけているゴーグルが特徴の太一という男の子がいた。その腕には……コロモン！？

太一「あーキャンプは吹雪で中止になっちゃった。これはヒカリのお土産。」

八神母「あらあ、妹思いな兄なこと。」

八神の母さんと八神さんが会話している間にも俺は怒りがこみ上がっていた。コロモンは普通に進化するとグレイモンになる。俺の両親を殺したかもしれないデジモンが平然として存在しているからだ。今すぐ殺してやりたいが八神が悲しむと考えると……。俺の心は行き場のない怒りでいっぱいだった。

「……………八神さん。すみません。」

俺はそう言って八神の家から逃げるようにして走り去った。行くあてもなく……。

八神家（後書き）

闇斗「なあ、あの「女装オバサン」の響きどつかで聞いたことがあるんだが…。」

ゼクセル「うん。この子が出てくるアニメのキャラを元ネタにしているからね。出てきてー。」

？「闇斗くん。きつとそれはしまっちゃんおじさんだ。」

闇斗「おいクソ作者！変な青いラッコ連れてきてんじゃねー！お前もなんだよ「しまっちゃんおじさん」ってよ！」

ゼクセル「変な青いラッコとは失礼だぞ。某ぼのぼとしたアニメに出てくる主人公のぼのぼのくんだぞ。」

闇斗「知らねーよ！そんなの！そんなマイナーなアニメのネタまぜんな！読者あきれるだろうが！お前も早く帰れ…」

？「さあゝ、つかまえた。」

ぎゃあああああ…」

ゼクセル「はい。闇斗君はしまわれました。当分帰ってこないと思います。読者のみなさんすみません。こんなマイナーなアニメのネタを使いました…」

？「人のアニメをマイナー扱いする悪い子はしまっちゃんおうね。」

ぎゃあああああ…」

スタッフ「ゼクセルさんもしまわれたのでスタッフの僕が次回予告です。次回はパンプモンとゴツモンの登場です。お楽しみに。」

パンプモンとゴツモン（前書き）

今回は短めです。ご了承ください。

パンプモンとゴツモン

Side 闇斗

俺はあれから走りに走ったせいでどこにいるのか分からなくなった。ただ、言えるのは街の中だということ。

「はあ…。」

八神さんには悪いことしたなあ。せつかく泊めてくれると言ったのに…。後悔先に立たずとは正にこのことだ。謝りに行こうにもなかなか行けないし。どうしよう？

？「おーい、闇斗ー！ー！」

そう考えていると後ろから俺の呼ぶ声がした。後ろを振り向くと俺が仲間だと認めているデジモンの姿があった。

「パンプモン！ゴツモンも！」

ゴツモン「闇斗、1人で人間界に行くなんて…。僕らに1言言ってくれたっていいじゃないか。」

「すまん。急いでいたから。」

やっぱりこの2匹はいつもいっしょだな。しかし、何していたんだ？こんな所で？

パンプモン「ウィザーモン心配してたよ。」

はは。ウィザーモンは心配性だからな。でも、顔くらいは見せておくか。

「ウィザーモンはどこにいる？」

ゴツモン「ヴァンデモンのアジトにいるよ。」

「それならちょうどいい。ヴァンデモンにも顔を見せたほうがいいからな。場所を案内してくれねーか？」

パンプモン「いいよ。ついてきて。」

パンプモンが言つと来た道と逆の方向に歩き出した。

ヴァンデモン「デジタルゲート開通の件はありがたかった。」

「まあな。でも、8人目はまだ見つけていないぞ。」

ヴァンデモン「だろうな。」

「!!!!!!」

ブラック「どういうこと？」

おい、ホントにどういうことだ？

ヴァンデモン「実はお前たちに光の紋章のコピーを渡すのを忘れていた。すまなかった。」

.....ハアアアアアアアアア！？じゃあ見つけれ
れるはずねーじゃねーか。依頼するときに渡しておけよ。

「てめえ、ふざけんじゃねーぞ！！！！俺が8人目探すのに電車に
ひかれかけたり女装されかけたりしたんだぞ！！！！.....もう気分
悪い。寝るわ。」

全くあの女装おばさんに追いかけられるのはかくトラウマになっ
たわ。もうあんな思いしたくない。

Sideヴァンデモン

闇斗、鬼の形相で怒ってたな。まあ、私のミスだからしかたがない
な。

「闇斗の女装か.....。1度見てみたいものだ。」

部下共に闇斗の女装の服を買いに行かせようか。

Side 闇斗

な、なんだ？ すごい寒気がしたぞ。この感覚は…あの女装おばさんに追いかけられたときと似ているな。……………まさか、またそんなことが…

？「闇斗も苦労してるな。」

「ああ。まあな。……………ってうわぁ！……！お、驚かすなよ。ウィザーモン。」

ウィザーモン「すまない。それより……………大丈夫か？ いろいろと何かあったようだが……………」

「また心を読んだな。マジでやめてくれ。」

ウィザーモンはすぐに人の心を読むなあ。マジでやめてもらいたい。

「……………ほっといてくれ。あと勝手に人間界に行つてすまなかった。」

ウィザーモン「いや、別にいいが……………気をつけろよ。（主に女装される意で）」

そ、そんなのわかつとるわ！ 女装されてたまるか！ 俺の大事なものがなくなるわ！……………はあ、疲れたなあ。普通の依頼の数倍疲れた。

……………ああ、もう眠い……。俺はそのまま寝入ってしまった。

パンプモンとゴツモン（後書き）

次回は……どいしようかな。まあ、みなさん。よい年を。それでは
新年また会いましょう。

選ばれし子供の力（前書き）

今回はデスメラモンの回です。しかし、戦闘をとばすのでこの回は見てもらわなくても構いません。

選ばれし子供の力

Side 闇斗

俺が起きたのは朝8時くらいだ。かなり早めに起きてしまった。いつもは11時とかに起きているのに……。やっぱり、昨日の八神ヒカリって女が妙に気になる。もう1回彼女と会ってみよう。しかし、あの家から逃げてきているから……。少し行きづらい。それに昨日は偶然行けただけでどこにあるかは分からない。うーん……どうしよう？ そういえばあの女の心には……

ブラック「なに考え事してるの？ 闇斗。」

「ああ。昨日会った女についてだ。よく思い出すと彼女の心からは全く闇を感じなかった。」

ブラック「だから？」

「つまり、その女が8人目かもしれないということだ。」

ブラック「！？ どういうこと？ なんで心から闇を感じなかったただけで？」

「ヴァンデモンの言葉を思い出してみる。光の紋章に選ばれし子供だって言ってたろ。」

ブラック「う、うん。」

「光は闇と反対の存在だ。光に選ばれているなら心に闇がない可能

性がある。だから心に闇を感じなかった彼女が8人目の可能性がある。」

俺はブラックに自分が立てた仮定を話した。正直この仮定には自信がない。でも、何もないよりマシだと思って立てた。

ブラック「じゃあ、今日はどうする？」

「とりあえず昨日行った家まで行ってみよう。何か分かるかもしれない。」

そうして、俺たちはヴァンデモンのアジトを出て八神の家を探し始めた。

あれから4時間ほど経過しただろうか。俺たちは今迷子になっていた。昨日行けたからなんとかなるかと思っていたがそれが甘かった。パンプモンやゴツモンについてきてもらうべきだった。それにしても目の前にあるタワーはでかいな。デジタルワールドにもここまででかい建物は見たことないなあ。中を覗いてみようか……。そう思っている上ほつから爆発が聞こえた。俺は急いでタワーを出て上を見るとヴァンデモンの手下のデスメラモンとサボテンみたいなデジモンと火の鳥みたいなデジモンがいた。デスメラモンと戦ってい

ることからあのサボテンと火の鳥は選ばれし子供のデジモンだと推測する。

ブラック「どうする？」

「面白そうだから、傍観する。正体をくらすためのコートも持っていないからな。」

というわけでタワーがよく見える木の上でじっくり傍観することにした。デスメラモンは前に話したことあるけどあのクソな人間どもみたいに性格悪いんだよな。だから、あいつは死んでもしょうがないや。さて、神聖なる選ばれし子供の力を見せてもらおうか。

「ZZZZZZZZ…」

ブラック「起きて。闇斗起きて。」

闇斗「お、起こさないでくれ。今心底うんざりしてるんだ。まさか、あそこまで神聖なる選ばれし子供が弱いなんて…。もっと骨があるかと期待したぞ。」

あの戦いは神聖なる選ばれし子供が勝ったがデスメラモンにけつこ

うてこずつて勝ったみたいな感じだからな。デスメラモン相手に複数でやるなら少なくとも3分で倒してほしかったものだ。期待して損した。

ブラック「もう6時くらいだけどどうする？」

もうそんな時間か…。腹減ったし…

「街中に行くか。」

腹を満たすため街中へと行くのであった。そして、ヴァンデモンと絶交することは俺たちはまだ知らなかった。

選ばれし子供の力（後書き）

次回は渋谷の話です。闇斗が小説が始まって以来初めて戦うと思います。

ヴァンデモンとの決別（前書き）

闇斗「おい！クソ作者！俺戦ってねーじゃん！」

ゼクセル「いいじゃん。技はすっかり出てきているから。」

ブラック「クソ作者は気まぐれやでー。」

ヴァンデモンとの決別

S i d e 闘

く、くそう。やっぱり街になんて来るんじゃない。なんで毎回「女装おばさん」に追いかけられるんだよ!? マジでふざけるなよ! さあ、どうやって撒こうか? とりあえず路地裏だな。

ふう、なんとか撒けたぜ。さて、飯! 飯!

「いたっ!」

? 「うあ!」

路地裏を出たら、俺と同じくらいの緑色の帽子をかぶった男にぶつかった。

「つてーな! 気をつけろよ!」

? 「なんだと? お前からぶつかってきたんだろ!」

俺が少し強い口調でそう言つと俺より3歳くらい年上で髪がツンツンの男が俺の胸ぐらをつかんでキレてきた。さっきぶつかった男の兄だろうか？

？「やめてよ！お兄ちゃん！僕が悪かったから！」

と弟さんが仲介するが…

？「いや、こんな奴はぶん殴っておかないと駄目だな。」

おいおい、弟さんが仲介してるのにまだやめないってどうよ？

「3秒待つ。離せ。」

俺は命令口調で兄らしき人に言った。

？「なんだと！？お前！」

ブンッ

パシッ

？「なっ…？」

ドゴッ

？「がっ……」

さあ、みなさん。お分かりいただけただけであろうか？分からなかった人のためにハイライトがてら解説。まず彼が右ストレートをかましてきました。いやーなかなかいい拳ですね。しかし、俺はいとも簡単に左手で受け止めました。ここで彼が驚きの声がかましたね。そのスキを逃さず彼の腹に膝蹴りをおみまいしてK・Oです。弱すぎだろ…。少し膝入れたくらいで…。

？「お兄ちゃん！」

？「がつ……てめえ……」

まだやる気か？無駄な…。

「やめとけ。これ以上はどちらにとつても無意味だ。それに兄のくせにまた弟さんに仲介してもらうつもりか？」

？「ぐつ……。」

やっと食い下がったか。全く面倒くさいものだ。さて、どこで飯をすませようか？

S i d e ヤマト

何なんだ？あいつは？自分からぶつかっておいてあのふてぶてしい態度は？しかもよく見たらタケルと同じくらいの子じゃないか。そんな子に負けたのか…。なんか、ショックだな。しかし、あいつは何か裏がありそうだな。

タケル「お兄ちゃん！前からデジモンが！」

タケルが言うつと前からカボチャのかぶりものをしたデジモンと岩男みたいなデジモンがきた。

S i d e 闇斗

く、くそう。飯を食ったのはいいがまた「女装おばさん」に見つかってしまった。ホントになぜいつも見つかる？また、路地裏だ！あれを使わない手はない。な、なにい！？行き止まり！？ま、まずい！

女装おばさん「ハア…ハア…にがさないわよ。」

なに「ハア…ハア…」って！？マジでキモい！…仕方がない！

「闇の霧。」

俺がそう言つと俺と女装おばさんの周りは黒い霧に包まれた。この霧は目に入ると一定時間視界が黒くなる。つまり、しばらくにも見えなくなる。しかし、闇の力を持っているものや耐性がある者には効かない。そして、俺は「女装おばさん」から逃げた。…むっ、この闇の気配は…ヴァンデモンか。なぜいる？とりあえず行ってみよう。

行ってみるとヴァンデモンと二足歩行の狼のデジモンが戦っていた。さらに近づいてみると信じがたいものが落ちていた。パンプモンの

かぶりものだった。その近くには先ほど遭遇した2人がいた。

「お前ら…このかぶりものは？」

タケル「パンプモンとゴツモンが死んじやったよ…。」

俺はその言葉を聞いて怒りが満ちた。誰が…誰が殺した？

「ヴァンデモン！これはどういうことだ！？」

俺はパンプモンのかぶりものを手に持ちヴァンデモンに聞いた。

ヴァンデモン「…ふん。そいつらは私を裏切ったから始末した。問題ないだろう？」

なに言ってるんだあいつは！？人の仲間を勝手に殺しておいて問題ない？大ありだろうが！！！！

ヴァンデモン「そやつらは選ばれし子供だ。早く殺せ。お前ならすぐだろう。」

俺はそれに従わず手を銃の形にして闇を溜めヴァンデモンに向けた。

「闇の銃。」

俺がそう言つと闇の銃弾がヴァンデモンに向かっていく。

ヴァンデモン「くっ…闇斗！どういうことだ！？」

ヴァンデモンはなんとか闇の銃弾を避け俺に問いてきた。

「そのままの意味だよ。あんたには失望した。簡単に命を奪いやがって。ふざけんな！…俺はお前みたいな下劣な者は仲間とは認められねーな。お前との契約は破棄させてもらう！まず殺すべき者は選ばれし子供ではない。まず殺すべき者は…お前だ！ヴァンデモン！覚悟しろ！」

ヴァンデモン「お前も私を裏切る気か？よかるう。まとめて殺してやろう。」

俺は闇を体に纏い、ブラックデジヴァイスからブラックアグモンを出した。

「ブラックアグモン！行くぞ！」

ブラックアグモン、ダークネス進化！！！！！！……………
…ブラックグレイモン！！！！

ブラックはブラックグレイモンに進化させた。

「さあ、行くぞ。世の中の平穏のために。」

そして、俺らはヴァンデモンに立ち向かっていった。パンプモンとゴツモンの仇討ちのため…。世の中の平穏のため…。

ヴァンデモンとの決別（後書き）

次回は本当に闇斗が戦います。

闇の力（前書き）

最後のほうがけっこう雑です。すみません。

闇の力

Side 闇斗

「死ねえ！ヴァンデモン！」

そう言っつてヴァンデモンを殴るがあっさりと受け止められてしまった。

「ブラックー！」

ブラック「メガフレイム！！！！！」

ブラックはヴァンデモンにむけてメガフレイムを放った。しかし、俺を投げ飛ばした後によけられてしまった。

ヴァンデモン「闇斗、まさか私に勝つつもりでいるのか？」

ふん、なにを偉そうに…まるで自分が世界を支配したかのようだな。

「そのつもりだ。それがどうした？」

ヴァンデモン「無理なことだと言っているんだ。貴様と何年間いっしょにいたと思っている？攻撃のパターンなんてすでに知っているぞ。」

まあ、確かに3歳の頃からいるもんな。俺らの攻撃パターンなんて見切ってるだろうな。けどな…

「それはこっちにとってもいっしょなんだぞ。」

しかし、さすがに素手ではキツいな。なにか武器がないかな？

Sideヤマト

奴が…さっき会った奴がゲンナイさんが言っていた9人目の子供が…。

く過去・デジタルワールド ゲンナイの家く

ゲンナイ「あともう1つ言っておくことがあるな。」

太一「何だよ？」

ゲンナイ「選ばれし子供には9人目もある。」

一同「!!!!!!???」

9人目!? 8人目だけじゃないのか？

「なんで8人目といっしょに話さなかったんだ？」

俺がゲンナイに聞いた。すると、ゲンナイはこう答えた。

ゲンナイ「8人目は確実にお前たちの味方なんじゃ。」

光子郎「と言いますと？」

ゲンナイ「9人目はイレギュラーみたいな感じじゃ。お前たちの味方になるかすら分からんぞ。最悪、敵としてお前たちの前に出てくるだろうな。」

…イレギュラー！？なぜそんなのが？

丈「なんでそんなのが存在するんですか？」

丈が俺が思ったことと同じことを考えていたようでゲンナイさんに聞いた。

ゲンナイ「なぜなら9人目はこの世から消えない「闇」だからだ。したがって9人目の紋章は「闇」の紋章じゃ。」

や、闇って…まるで俺たちとは逆じゃないか！

空「でも、彼も同じ選ばれし子供なんでしょう？なんとかして仲間にできないかしら？」

俺がそんなことを考えていると空がゲンナイさんに聞いていた。

ゲンナイ「無理とは言わんがそのときは彼の中にある「闇」を理解することが必要じゃ。」

…どういうことだ！？俺には理解ができないな。

太一「よく分かんねーけどそんなときになりやあ分かるだろ。」

全く太一は…。単純なものだな…。そのあとは太一が話をまとめて終わった。

↓現在・渋谷↓

確かにゲンナイさんの言葉を思い出すとそんな感じだな。奴は。でも、なんだ？そんな悪そうな人間には見えないな。

闇斗「おゝい。お前。そこにある鉄パイプ投げてくれ。」

奴は俺に言ってきた。あまり言うことを聞きたくないが今は仕方がない。俺は鉄パイプを取って奴に投げた。

S i d e 闇斗

パシッ

俺は選ばれし子供が投げた鉄パイプを手で受け取った。そのあとに「闇の手刀」でさきをとがらせ、即席の槍が完成した。その槍に闇を纏わせ、ヴァンデモンに向かっていった。

ヴァンデモン「何度やってこようが無駄だ！」「『ナイトレイド』」

俺はヴァンデモンの攻撃を紙一重でかわし、槍を突く。突きはかわされたがそのあとヴァンデモンの腹に蹴りをいれた。もちろん、闇を纏わせて。これは直撃し、ヴァンデモンは後ろへ吹っ飛ぶものの空中で体制を立て直した。

「ちいつ！」

ヴァンデモン「知っているぞ。このあとは」「『メガフレイム』」がくる

？「『カイザーネイル』」

！！？」

その声には俺も驚いた。なぜなら、このあとはヴァンデモンの言った通りブラックがメガフレイムがくるはずだったからだ。それなのにさっきの狼型デジモンがヴァンデモンに必殺技を放っていた。ヴァンデモンはそれをかわすがかわした先にはメガフレイムが飛んできていた。通常のグレイモンが放つよりスピードが速いメガフレイムに反応ができなく直撃した。

ヴァンデモン「ぐおおおおお！！！！」

ヤマト「やったか！？」

いや待てえ！それはやってないときの名ゼリフだろうが！やってないフラグを建設するな！！

ヴァンデモン「この程度で……図に……乗るな……今回は見逃してやる。次会ったときに……お前たちの最後だ……」

はいはい。左にでも受け流しておきまーす。ヴァンデモンは夜の空に溶けるように消えていった。つか……

「なんで邪魔をした？俺らだけでも行けた。」

ヤマト「俺は俺でヴァンデモンを倒そうとしたただけだ。そのどこが悪い？」

ぐっ……。今回はあちらのほうで正論だな。まあ、今回はいいか。

「今回は見逃してやらあ。次はお前らを殺す。」

そう言い残して立ち去ろうとするが、

タケル「待って。ねえキミ、名前は？」

「……闇斗だ。」

タケル「僕たちといっしょに来ない？」

！？…………なにを言ってるんだ？こいつは？殺すと言ったやつにそんなことを言うか？

「…………俺は闇だ。光とはなじむ気はない。」

と言って立ち去った。そのあとは近くの公園のベンチを使って寝た。翌日、あんなことが起きるとは知らずに…。

闇の力（後書き）

次回は闇斗無双です。
… たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367z/>

デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

2012年1月8日23時46分発行